

## ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ⑧

2023年04月12日 日刊ベリタ

### ミャンマー国軍が民主派を空爆、住民100人以上が死亡 国連総長、日本政府が強く非難

ミャンマー北部のザガイン管区カンバル郡で11日、民主派の市民統治委員会事務所の開所式に国軍が大規模な空爆を行い、女性や子どもを含む100人以上が死亡した。国連のグテーレス事務総長は同日、犠牲者とその家族に深い哀悼の意を表するとともに、「国軍を強く非難する」との声明を発表。松野博一官房長官も12日の記者会見で、「本件を含め、多くの民間人が死傷する事態が引き続き発生していることを強く非難する」と述べた。

ミャンマージャパンが地元メディアなどの報道として伝えるところによると、11日午前7時30分頃、カンバル郡パジジー村にジェット戦闘機が飛来し一帯に爆弾を投下し、さらに戦闘ヘリが200発以上のロケット弾で攻撃した。この空爆により少なくとも100人が死亡し、数十人が重軽傷を負った。これまでに56人の遺体が確認され、5歳未満の子どもが5人、18歳未満の未成年者が17人含まれていたという。犠牲者の総数は100人を超えるとみられるが、遺体の損傷が激しいため集計が困難だという。

民主派の国民統一政府（NUG）は、「テロリストであるミャンマー国軍による無差別な武力行使は戦争犯罪だ」と強く非難し、軍事独裁政権を早期に終わらせるよう世界各国に呼びかけた。

これまでのところ、軍評議会（SAC）はコメントを発表していない。

グテーレス国連事務総長は声明で、国際人道法に従って民間人を保護することが最優先事項で、影響を受けた人々が直ちに治療を受け、必要な支援を受けられるよう要請。その上で、軍評議会（SAC）に対し、国民に対する全ての暴力行為を直ちに停止するよう求めた。

松野長官は記者会見で、国軍を強く非難するとともに、「日本政府は昨年2月のクーデター以降、国軍に対して暴力の停止を一貫して求めており、アウンサンスー・チー国家顧問を含む被拘束者の解放や民主的な政体の早期回復に具体的な行動を取るよう、改めて強く求める」とコメントした。

2023年04月13日 日刊ベリタ

### 【4/14 開催予定】ミャンマー 緊急院内集会 〈カンバル虐殺事件を国際社会・日本政府は黙って 見ているのか？〉

ミャンマー北西部ザガイン管区カンバル郡で11日、同国軍の大規模な空爆により多数の民間人が虐殺されたことを受け、有志の在日ミャンマー人や日本人支援者らは14日、参議院議員会館内で緊急院内

集会〈カンバル虐殺事件を国際社会・日本政府は黙って見ているのか？〉を開催する予定。

以下、主催者のSNSより転載。

[https://m.facebook.com/story.php?story\\_fbid=pfbid0mddZg3tvh83wMpA3ZDafj9aSE2s17Lu6ds4jKFmz1WEpyYKvb4M9Hk7U6gPd39Brl&id=100000451342406](https://m.facebook.com/story.php?story_fbid=pfbid0mddZg3tvh83wMpA3ZDafj9aSE2s17Lu6ds4jKFmz1WEpyYKvb4M9Hk7U6gPd39Brl&id=100000451342406)

軍事クーデタによって実権を握ったミャンマーのテロリスト・軍事評議会（SAC）は4月11日午前7時ごろ、国内北西部ザガイン地域カンバルの村において空爆及びヘリによる機銃掃射をおこない、住民ら120名以上が犠牲となりました。

残虐極まりない虐殺行為を実行したテロリストSACに対して、私たち在外ミャンマー人コミュニティは最大限の怒りをもって抗議するとともに、日本

政府及び国際社会に対して、ミャンマーの自由・人権・民主主義回復のために、なお一層努力するよう要請する緊急院内集会を行います。

日時：2023年4月14日（金）16時～17時半  
場所：東京都千代田区永田町・参議院議員会館／地下1階B107会議室

（東京メトロ各線・永田町駅／国会議事堂前駅から徒歩数分）

→入館には通行証が必要です。開始約30分前から入口ロビーにおいて通行証を配布します。

主催：在外ミャンマー人コミュニティ

2023年04月10日 日刊ベリタ

## 「異国に生きる ミャンマーの子どもたち」<5>

### ティンジャン（水かけ祭り）で新しい年を祝う 押手 敬夫

ミャンマーの数多い祝日の中でも、最も大切なイベントがティンジャン（水かけ祭り）である。水をかけることで1年の不幸やけがれを洗い流し、心新たに新年を迎えるという意味がある。

ミャンマー暦で今年の元日は4月17日。新年を迎える前の4日間がティンジャンの休日と都合5連休になるが、これはごく最近のことで以前は元日を挟んで10連休であった。

ミャンマーでは日本のように航空路線は勿論のこと鉄道網も未発達のため、地方からヤンゴン等の大都市で働く人々が帰省する場合はバス利用が大半である。ひとたび辺鄙な地方都市への帰省は片道だけで3日ほど要すこともあるので、ティンジャンとそれに続く正月休みは故郷に帰れる1年に一度の貴重な連休だったのである。

私がヤンゴン駐在当時に体験した水かけ祭りはそれは凄まじいものだった。手で掬って優しく水をかけるような生易しいものではなく、大通りのあちこちに設営されたステージから数十本の強烈なホースで狙いを定めて容赦なく放水し、その他バケツや水鉄砲などありとあらゆる道具を駆使して通りを歩く人々をずぶ濡れにさせる残酷な祭りだが、それがミャンマー人にとっては1年で最も楽しい休日なので



ステージで民族舞踊を披露する子どもたち（東京・戸山公園）

ある。このくらい強烈に水を浴びれば、どんなけがれもきつときれいに洗い流せるわけである。

若者たちはこの日にあわせ仲間と金を貯めてトラックをレンタルし、荷台から四方八方に水をかけながら4日間街中を走り回る。通りに作られたステージからホースで放水したい人は結構多額の金を払って朝から晩まで水をかける権利を得る。日本で言う大晦日にあたる4月16日は水かけ祭りの最終日で、初日から毎日徐々に値が上がるステージ料金もこの日がピーク、因みに4日間の通し券もある。しかし2021年の軍事クーデター以降ミャンマー人が心待ちにしていた水かけ祭りは、軍事政権への抵抗を示す

ため行われていない。政府が市庁舎前に巨大なステージを設営しても今は誰も申込み人はなく、街を走り回るトラックの姿もない。

ミャンマーの4月は1年で最も気温の高い暑気であり、40℃を越える日もしばしばあるためこうして突然水をかけられても寒いことなどまったくない。暑いから水をかけるというある意味本能的なことだが、日本ではやっと桜が散り始める頃、日中の気温もせいぜい20℃前後でいきなり水など掛けられては大変なことになるため、水かけ祭りとは名ばかりで実際には水はかけない。

ミャンマー人にとって最も楽しい祭りは、日本で暮らすミャンマー人でも同様に今年ティンジャンは4月9日である。日本の各地に暮らすミャンマー人は、それぞれの土地でティンジャンを祝う。今回東京では日比谷公園と新宿区の戸山公園の2か所で開催された。ステージでは代わる代わる着飾ったロンジー姿のミャンマー人や日本人が、大人も子どもも歌を歌い伝統舞踊を舞う。

ミャンマー料理を楽しめる屋台や民芸品を販売するテントもでて、祖国から遠く離れた東京で故郷を

思い同胞との1年振りの再会を喜び日である。

日頃、ケヤキハウスでミャンマーの言語や伝統文化を習うシュエガンゴのこどもたちも、今日はお揃いのロンジー姿で先月から練習を重ねた踊りを披露した。こうして彼らも祖国の伝統文化を学んで、また一つ成長していくのである。

夕方になりそろそろ今年の東京でのティンジャンもフィナーレが近づいてきた。

つい先程までミャンマー人によるカラオケ大会だったステージもすべてが片づけられ、舞台には日緬2人の若者が2つ大きな国旗を掲げて登壇した。ひとつは1日も早い平和を願うウクライナの国旗、そしてもうひとつは民主化を願うミャンマー国旗だが実は現在のものではない。2010年に制定された今の国旗は軍事政権下の手によるものでミャンマー国民は嫌っている。軍事政権の正統性を否定し、真の民主化を求め共和制時代のビルマ連邦の国旗がミャンマー人の誇りで、若者はその当時の国旗を掲げている。力強い演奏が流れる中、2人はウクライナとビルマ連邦の国旗を大きく左右にいつまでも振り続け両国の平和を祈った。

2023年04月06日 日刊ベリタ

## ミャンマー「夜明け」への闘い(26)

### 現金がない！未明から銀行前に長蛇の列

西方 浩実

2021年5月14日。「今日は夜中3時半から銀行に並んだの」。・・・は！？夜中3時半？？驚く私に、彼女は疲れた声で、さらに驚くことを言った。「でも、もうその時点で、100人もの行列ができていたの。朝9時に窓口が開くまで6時間ちかく待ったけど、結局私はお金を下ろせなかった」

彼女が住むのは、ミャンマー中部の地方都市だ。その街には、銀行でお金を下ろすべく、周辺の農村部から毎日何十人もがバスをチャーターしてやってくるのだという。夜間外出禁止令が終わる朝4時を過ぎると、さらに列が長くなる。とにかく今ミャンマー人は、現金を手に入れようと必死なのだ。

「私たちは基本的に、銀行を信用していないの」。そう教えてくれたのは、元銀行員の友人だ。「国営

銀行はもちろんだけど、大手民間銀行も軍との繋がりがあがる。だから自分の預金が軍の命令によっていつ引き出せなくなるかと不安なのよ。だから今たくさんのお金を引き出しているけど、預金する人はいないから、銀行にも現金がなくなっているみたい」。

同僚は、指を折りながら説明してくれる。「ATMからは今、週2回、30万チャット(約2万1000円)ずつしか下ろせないんだ。僕の貯金は全部で300万チャット(約21万円)だから、全部で10回、5週間かけて引き出すことになる」。とはいえ、週に2回というのは、あくまでルールの話。実際には、銀行窓口やATMの現金がなくなれば、そこでおしまいだ。彼も、先週ほぼ毎日仕事を早退してATMに並ん

でいたのだけれど、現金を引き出せたのは1日だけだった。

さらに悪いことには、ATMの機械に補充される現金の量が、今週から3分の1(約500万円から約160万円)に減ったのだという。「毎日並ぶ人は増えるのに、扱う現金は3分の1。とても行き渡らないよ。それに実際には、現金が1チャットも補充されない日もあるんだ。そんな日は何時間も並んで手ぶらで帰るしかない」。そう言って、彼はオーバーリアクションで嘆いてみせる。「僕の全財産はどうなっちゃうんだろう！」

こうした状況下では、新たな商売も生まれる。たとえば、本人の代わりに銀行の列に並んでくれる「並び屋」。友人は5000チャット(約350円)で、朝5時から14時半まで並んでもらったという。でも、結果は散々だった。並び屋から「そろそろ順番がくるよ」と電話がきたので、意気揚々と出かけたものももうすぐ自分の番、というところで、銀行の現金が切れたのだそうだ。「5000Ks払って、結局1Ksももらえなかった」と友人は嘆く。今ミャンマーの人々は、来る日も来る日もこんなことを続けている。銀行に預けた自分のミャンマーチャットを、取り戻すために。

銀行の支店によっては、行列をつくらせるのではなく、預金引き出しの整理券を配るところもある。しかしこの整理券も、またたく間に配布終了となった。大手の民間銀行のある支店では、なんと2ヶ月半も先(8月末まで)の整理券を、すでに配り終えたのだという。きっと今後、市場に出回った整理券が高値で取引されるようになるだろう。

こうした状況で跋扈するのは、地下取引だ。インターネットバンキングなどで指定の口座に送金すると、ミャンマーチャットを払い出してくれる。ただし手数料が高い上、その値段も上がり続けている。

ある友人は、興奮気味にこう教えてくれた。「2週間前に業者をつかったとき、手数料は引き出し額の2.5%だったの。それが、たった2週間で、10~15%に上がったのよ!1円でも惜しいときに、15%なんてとても無理だよ」

信用がないのは銀行だけではない。現地通貨であるミャンマーチャットの信用も、恐ろしく低い。これは過去の軍事政権の教訓でもある。軍は過去に3



開店前の銀行の前で列を作る人たち。街のいたるところでこうした光景が見られる。いったいこのうちの何人が、今日現金を手に入れることができるだろう(The Irrawaddyより)

度、悪名高い「廃貨」を実行しているのだ。廃貨というのは、例えば「今日から千円札は使えなくなりました」というアナウンスが出て、いきなり千円札が紙くずに変わるといふ、ウソみたいな政策だ。

「社会主義の本当に貧しい時代に、長い間コツコツ貯めたお金が、いきなり紙くずになって、気が狂った人もたくさんいたんだよ」と、友達から聞いたことがある。

そんなわけで、ミャンマーチャットを信用しない市民たちは、現金を手に入れたら、次々に貴金属やドルを買い始めた。すると、そうしたものの価格がぐんぐん上がりだす。クーデター前、1ドルは1350チャット(108円)だったが、たった3ヶ月半で1750チャット(124円)まで上がった(注)。金(ゴールド)の価格も上昇を続け、1ビス(ミャンマーの単位。約16.5g)に対し、たった1日で数千円も値上がりすることもあるのだという。

同僚は「Everyday(毎日)じゃなくて、Every hour(毎時間)チャットの価値が落ちていくね」と苦笑した。

一見落ち着きを取り戻した街で、日々進行する異

常事態。社会や経済はこうやって崩壊していくのか。政府を失った市民たちが、今日も現金をめぐる列をつくる。

注・なお、クーデターから1年半が経った2022

年8月現在、ミャンマー中央銀行の公定レートは1ドル2100チャット(約133円)まで切り下げられている。市中の闇レートは、日によって4000チャット(約250円)台まで下がっている。

2023年04月11日 日刊ベリタ

## ミャンマー「夜明け」への闘い(27)

### 変わりゆくロヒンギャへのまなざし

西方 浩実

2021年6月29日。「正直言うと、私はクーデターが起きるまで、少数民族の人たちよりも国軍の方に親近感を持っていた」。ビルマ族の友人が、そう打ち明けてくれた。「でも今は違う。クーデター後の軍の仕打ちを見て、少数民族の人たちがどんな目に遭ってきたか、ようやく理解したの」。

クーデターなど起こらなければどんなに良かったかと思う。でもクーデターのおかげで、良い方向に変わったことがあるとしたら、それは迫害される弱者への、共感のまなざしかもしれない。

雨季のミャンマー。この国でこの季節を体験するのはもう数回目だけれど、今年になって初めて耳にするようになった言葉がある。「避難民の人たちは、雨の中でどうやって過ごしてるんだろう」「ジャングルに逃げたカチン族の人たち、大丈夫かな」

ミャンマーでは、独立後から70年以上ずっと内戦が起きていた。だから国境近くのエリアには、今ほどではないにせよ、いつもどこかに国内避難民がいたのだ。にもかかわらず、ヤンゴンに住む多数派のビルマ族の人たちが、こうして少数民族を慮る言葉を自然に口にすることは、以前はなかったように思う。まして、ロヒンギャ(注1)にまで同情的になるなんて、誰が予想しただろう。

ミャンマー西部に住む少数派のイスラム教徒、ロヒンギャの人々は、多数派のビルマ族からはもちろん、他の少数民族にすら嫌われていた。私は以前、シャン族やカレン族など少数民族の友人たちに、ロヒンギャに対する思いを聞いたことがある。反応はすべて、否定的だった。「ロヒンギャ」という名前を私が口にした瞬間、彼らは煙を振り払うように顔の前で手を払いながら「ロヒンギャじゃない、ベン



クーデターが起きた直後の2月、ヤンゴン中心部の路上で。プラカードには、ロヒンギャ危機についてこれまで関心を持たなかったことについて「とても悔やんでいる」と書かれている。Twitterに投稿されたこの写真には、ビルマ族をはじめ色々な民族から「その通り」という共感のコメントや、ロヒンギャからの感謝の言葉が寄せられた。(写真はロイター通信より)

ガリ(注2)と顔をしかめた。

「彼らはそもそもミャンマー人じゃない。移民だからバングラデシュに帰るのが筋だ」「男性は女性にたくさん子どもを生ませるけど、女性も子どもも大事にしない。ミャンマーとは文化が違う」「軍に攻撃されて追い出された、というけど、あれはやつらの自作自演だ(注3)」、などなど。基本的に「超」がつくほど優しいミャンマーの人たちが、ロヒンギャにだけは厳しかった。私が反論しようものなら「外国人にはわからない」とシャッターをおろされた。確かに、それはそうなのかもしれない。

だから、ロヒンギャに対してクーデター後、ミャンマー人たちの中からFacebookやTwitterで「今までごめんさい」とコメントが出てきたときには、

心底驚いた。そして実を言うと、疑った。本当に、本気で言ってるの？と。

それでも、ミャンマー市民の希望である NUG（民主派の亡命政府）も「ロヒンギャに市民権を与える」と約束し、それに文句を言う人もいない。いったい、本当に本気で、ミャンマーの人たちはロヒンギャを受け入れようとしているのだろうか？それとも国際世論を味方につけるためのパフォーマンスだろうか？

疑り深い私は、ふたたび同僚や友人を捕まえて聞いてまわった。あるビルマ族の友人はこう話してくれた。「軍がロヒンギャの村に火をつけたり虐殺したりした、というロヒンギャ側の訴えを、私は彼らの自作自演だと信じていたの。でも、違った。同じ立場になってみて、軍の仕業だとわかった。全く同じことが私たちにも起きて、ようやく真実がわかったの。私だけじゃなくて、彼らに謝りたいと思う人はたくさんいると思う」

じゃあ、彼らがミャンマー国籍をもつようになってもいいと思う？

「うーん・・・そこはイコールではないんだよね。だって、ミャンマー人とロヒンギャは、あまりに違いすぎるでしょう。言葉が違う。文化が違う。宗教が違う。子どもをたくさん生むから、家族観も違う。そして、彼らが移民であることには変わらない。何をもちて彼らを『ミャンマー人』と認められるんだろう？」

彼女の指摘はもっともだと思う。公式に認められているだけで 135 もの民族が、独自の言語や文化を持つミャンマー。ロヒンギャをミャンマー国民として認めるかどうかというのは、「ミャンマー国民とは何か」という壮大な問いに、答えを見つける作業でもある。

別の友人にも聞いてみた。「NUG が、ロヒンギャに『兄弟姉妹のみなさん』と語りかけて、市民権を与えると約束しているけど、それはやりすぎ、という批判はないの？」

彼はこう答えた。「ないと思う。少なくとも僕は見たことがない。もし SNS でそういう投稿があったら、それは軍側の罠だろうね。多くの人が『これは軍の支持者だ、だまされるな』とコメントすると思うよ。そうやって人々の中に分断を生むのは、軍の

得意技だからね。今までそうやって何度も、ムスリムと仏教徒との対立が作りだされてきたんだ」

・・・うーん、でももしかしたら「軍政だけど、ロヒンギャは認めない」という人だっているかもしれないじゃない？私がおも食い下がると、彼はあっさりと肯定した。

「うん、確かに民主派の人たちの中にも、ロヒンギャを受け入れるところまでは気持ちがついていかない人もいると思う。でも、たとえ意見が違って、今は NUG を批判すべきじゃないと、みんな思っているんじゃないかな。僕もそう思うよ。今は 1 つ 1 つの政策を取り沙汰して仲間割れすべき時じゃない。とにかく団結して軍を排除するのが最優先なんだ」

じゃあ、軍を排除して民主的な政府になったら、そういう政策の違いで揉めたりする？「そうだね。NUG 政府になったら、今は見えない意見の対立が表に出てくるかもね。それは残念なことではあるけど、でも今仲間割れして軍政に屈するよりはずっといい。ロヒンギャ問題には、長い歴史があるんだ。僕たちは誤ったことを信じてきたし、ロヒンギャだってそんな僕らに不信感があるだろう。どういう風にロヒンギャを受け入れるかは、NUG 政府のもとで、みんな考えていかなきゃいけないよね」

その後、ある友人が「こんな記事を読んだよ」と教えてくれた。ビルマ語で書かれたそのオンライン記事には、こんなことが書いてあったという。

もし NUG が政権をとって、ロヒンギャに正式に市民権が与えられたら、（地理的に同じエリアに暮らす）ラカイン族たちは『NUG が受け入れるなら、そちらで引き受けて下さい』と、ロヒンギャをビルマ族のエリアに追い出すかもしれない。そのとき NUG は、どうするだろう？ロヒンギャをラカイン州の問題にしてはならない。これは新しい「ミャンマー連邦」の課題だ。ロヒンギャもラカイン族も、その他の民族も、みんなで頭を寄せて話し合おう――。

奇しくも、軍事クーデターによってもたらされた、前向きな変化の兆し。クーデターがなければ、ここまで劇的な変化は起きなかつただろう。民主主義を取り戻して、連邦制を築いたら、ミャンマーはきっと以前よりもっと優しい国になる。

がんばれ、ミャンマー。

<注>・

1. 主にミャンマー西部のラカイン州に住む少数民族派イスラム教徒。「ベンガル地方（バングラデシュ）からの不法移民の集団」と位置付けられ、差別・弾圧されてきた。1982年に施行された国籍法で、ミャンマー国民と認められる135の民族にロヒンギャは入っておらず、選挙権も認められていない。

2・ベンガル地方（バングラデシュ）からきた不法移民であることを意味する蔑称。

3・ロヒンギャは半世紀前から迫害され続けている

が、特に国際的に大きな話題となったのは2017年8月。ロヒンギャの武装勢力であるアラカン・ロヒンギャ救世軍（ARSA）がミャンマー政府の軍事拠点を攻撃した報復として、ミャンマーの軍や警察がロヒンギャ掃討作戦を開始。国連調査団によると少なくとも1万人のロヒンギャが無差別に殺戮され、バングラデシュに逃れた難民は合わせて100万人を超える。

2023年04月16日 日刊ベリタ

## ミャンマー「夜明け」への闘い（28）

### 刑務所から反軍政の不屈の叫び

西方 浩実

7月28日。カンカンカンカン…先週金曜日、昼ごはんを終えて眠気と闘っていると、とつぜん鍋を叩く音が聞こえてきた。びっくりして窓から顔を出すと、アパートの住民たちが何人か、ベランダで金物を叩いている。あれ、今日何か鍋叩きの呼びかけあったっけ？と、あわてて台所に金物を取りにいきながら、片手でFacebookをスクロールする。

どうやらこの鍋叩きは、その日の朝、ヤンゴンにある国内最大の刑務所、インsein刑務所に入っている人たちが、所内から反軍政のシュプレヒコールをあげたことに呼応したものだ。インsein刑務所のシュプレヒコールは、女性たちの棟から始まり、所内全域に広がった。囚人を監視するはずの看守たちの中にも、一緒になって声をあげた人がいたという。

あたりまえだが、刑務所には逃げたり隠れたりできる場所などない。つまり兵士や警察に踏み込まれても、逃げ道などどこにもないのだ。それでも彼らは、外でその声を聞いてくれる人の存在を信じて、命がけで叫んだのだろう。

政治犯支援協会（AAPP）の声明によると、この抗議の背景には、刑務所のずさんなコロナ対応の現状がある。インsein刑務所ではコロナが蔓延しているにもかかわらず、特別房や所内の病院にいる人だけが治療を受けられず、ふつうの囚人や看守には



インsein刑務所。クーデター後に逮捕された人は、約7000人にのぼる（2021年7月26日時点）。その中には、自由と民主主義を求めた罪なき人々が、数多く含まれている（写真：Frontier Myanmarより）

防護具すら配布されないという。つまり軍は、コロナの予防や治療をしないことで、クーデター後に逮捕した数千人もの市民を見殺しにしているとも言える。このインseinの叫びは、まさに文字通り、命をかけた抗議だったのだ。

報道によると、この抗議の直後、兵士を積んだトラックが6台、刑務所内に乗り込んでいったという。一部の地元紙は「囚人たちが射殺された」と報道したけれど、続報はなく、何が起きたのか真実はわからない。

「刑務所で何が起きているか、僕にはわからないよ。何かわかるとすれば、今までミャンマー軍政下

の刑務所で、人々がどんな扱いを受けてきたか、ということだけだ」。電話口で、知人はそう言ってしばし黙り込んだあと、軍が囚人たちを虐殺した前科について静かに語った。

1990年。その2年前にクーデターで政権の座にいた国軍は、選挙で選ばれた政党に政権を渡すと公約していた。しかし軍は、選挙で圧勝したアウンサンスーチー氏率いるNLD（国民民主連盟）に政権を渡すどころか、NLDの指導者を次々に逮捕するという暴挙に出た。このときインsein刑務所に入れられていた民主活動家などが、政権をNLDに渡せ！とハンガーストライキを行ったのだ。彼らは殴る蹴るの暴力を受け、40人以上が負傷し、6人が殴り殺された。看守たちは、囚人たちの叫び声をかき消すために、大音量で歌謡曲をかけていたという。

「軍は何でもやるよ」。いつも軽妙な友人の口ぶりは重い。刑務所内にいる友人の顔が、浮かんで消える。彼もこのシュプレヒコールに参加したのだろうか。どうか、どうか、無事でいて。

## ▽NUGの宝くじ

8月14日。先週、本当に久しぶりに、シュプレヒコールを聞いた。少し先の大通りから聞こえてくる、民主主義を叫ぶ声。外出禁止令を守っておとなしく自宅にいた私は、一瞬耳を疑い、そしてすぐにベランダに飛び出した。

うちのアパートから、大通りは見えない。それでもアパートの住民たちが、パラパラとベランダに出てくる。「おい、聞こえるか。早く早く」と家の中を振り返って誰かを呼ぶ人。いいぞいいぞ、と手を叩く人。

シュプレヒコールは、またたく間に移動し、風のように消えていった。時間にして、わずか1、2分だっただろう。軍に通報されて捕まる前に、走りながら声をあげ、大急ぎで解散するのだ。この近くには、兵士たちの駐屯地がある。どうか逃げきれますように…。祈るような気持ちで、ベランダから空を見上げる。青い空。

民主主義を取り返そうという人々の願いは、軍の虐殺によって、そして今は新型コロナによって、表面上は押さえ込まれている。それでも時々こんな風によみがえっては、半年前のあの気持ちを思い起こ

させてくれる。

「ねえ、宝くじの話きいた？」電話をかけてきた同世代の友人が、何やらうれしそうに尋ねてきた。え？宝くじ？知らないよ。何か始まるの？「そう、NUGのオンライン宝くじだよ！」

なんと、民主派勢力の政府NUG（国民統一政府）が、宝くじを売り出すというのだ。1枚2000チャット（約135円）で、5枚（約670円）から購入できるらしい。売り上げの7割が、NUGやPDF（国民防衛隊）などの民主主義勢力にまわり、3割が配当金になるのだという。

クーデター以前、宝くじはけっこう人気があった。1枚1200&#12316;1500チャット程度（元値の1000チャットに、販売者が利益分を上乗せして売る）で、1等はなんと1億円。同僚たちもよく買っていて、たまに誰かが5万チャット（約4000円）くらい当たると、みんな、イエーイ、ビールおごりー！などとふざけ合っていたものだ。

だがクーデター後、見事にだれも宝くじを買わなくなった。売り上げの6割が政府に入る仕組みだからだ。社会の発展のため、という本来の用途を、もはや信じる人などいなかった。いつも自宅横の路地で、白い軽ワゴン車のトランクを開け放って宝くじを売っていたおじさんが、クーデター後、トランクの中の定位置に座り、うなだれていた姿を思い出す。あの白いワゴン車も、もう数ヶ月見ていない。

宝くじの売れ行きが激減したためだろう、軍は1億円だった配当を3300万円まで値下げした。市民たちは「賞金も払えなくなった」と嘲笑し、溜飲を下げた。

「NUGの宝くじに関しては、賞金は当たらなくていいの。これを買うこと自体がサポートだから」。嬉しそうな友人に、お金はどうやって払うの？ネットバンキング？と聞くと、彼女は「それが問題よ」と声を落とした。「NUGは、宝くじを買う人の安全を一番に考える、って。軍はすでに『NUGの宝くじを買ったら法的措置を講じる！』って言うてるからね」

あー出た、いつものやつだね。そう言って二人でため息をつく。「そう。それに今日軍政が、来週から銀行を一斉閉鎖するってアナウンスを出したでしょ。そのせいで、銀行を経由したやりとりができな

なくなったの」

えっ、まさかあの銀行の閉鎖は、宝くじ販売を邪魔するため…？そう聞くと、彼女は「わからないけど、ありえるよね。ほかに理由がないもん。宝くじの販売開始は15日(日)の予定だから、タイミング的にはぴったり。でもNUGが、何か安全な方法を見つけて、アナウンスしてくれると思う」と期待をこじませた。

その後、別の友人にも宝くじの話聞いてみた。

2&#12316;3月に、デモの先頭に立っていた友人だ。彼は「もちろん買うよ」と明るい声で即答した。「もうデモはできない。殺されるから。でも僕たちはどんな手段を使ってでも、勝つまでたたかう。宝くじも、立派な戦略だよ」

そして、胸を張ってこう言った。「僕はクーデター前までは、自分の楽しみのために宝くじを買っていた。だけど今度は、自分の誇りとミャンマーの未来のために、宝くじを買うんだ」

